







清くんと  
 しのを  
 落しに響と  
 美去乃  
 メ遠い  
 本うろ  
 懐と  
 口ト格で  
 文珠と筆乃  
 あやまりるるべー



文珠と筆乃  
 あやまりるるべー





徳云の  
 さらめんが  
 ありもの也  
 常く  
 貴季  
 母人ば  
 常季  
 平生の  
 ぶと  
 たり



日比の  
 大志  
 貴季  
 毎  
 くらび  
 遠に  
 軍  
 矢と  
 不  
 幸  
 病  
 醫  
 者  
 人  
 が  
 へ  
 ん  
 ざ  
 くら  
 と

ま砂中一





いろのづくと  
 ひとと  
 ぶこぞでま  
 ほまろあ  
 あり  
 常く  
 こと  
 千  
 べー



緋屋乃  
 明後日と  
 呉彼屋の  
 ぼやど  
 言季毎に  
 こと  
 といとに  
 あやの  
 るにあい  
 一すのづれば

吉中二



仲るま乃あ合にお後が志まうぬと孫人の美い結  
 紐が結白こゝろまうあけいそ船頭が多めておが心へ  
 のび〜一人の文殊より二人乃たろとよる工まあべー



ま砂中三





ま砂中四







身とてゝる菘あぶらの  
 ちんちん我身  
 がアア毛  
 油あぶらめをく  
 かせだあ  
 彼菘あぶらに  
 へうぬ  
 我身あぶら



實ねへ月の  
 合あせと  
 合あえ一い身  
 重しん代の道々  
 賣うりおよと  
 寝ねむを乃  
 娘むすめ瓜  
 傾かた城しろり  
 賣うりまら  
 子こ捨すてる  
 菘あぶらいあれど



志砂中六





傾休の辻作と  
 夫人乃かあまふと  
 後世の方便にて  
 智にわらうに  
 仏の善くも  
 歌中の様も  
 ありしはあま  
 くらり内々

舟中



人の乃我身乃乃  
 結念れあり  
 人の乃我身乃乃  
 衣念の  
 之らに  
 世常  
 後念佛  
 くらあ  
 くらあ  
 べー





人を  
 木下に  
 見えぬと  
 幸  
 あり  
 此の  
 幸  
 あり  
 怪我する人  
 平生  
 幸あり



小男に強力  
 そのあり  
 親父より  
 針の細きほど  
 のまればど  
 小粒でも  
 幸あり  
 かさるば

八中砂





初生  
あは



神のまゝのまゝりにて  
 人の信紙まゝあまの  
 まゝりにて  
 利敷にあらねど  
 結構なまゝでも  
 茶紙に色で  
 人乃信通  
 之室も  
 まゝりにて  
 縮乃尻毛  
 信紙にて

ま妙中九





子供  
 の  
 親  
 の  
 大徳  
 後  
 身  
 親

十中  
 砂



初  
 の  
 後  
 千  
 蟻  
 千  
 幸





鳥中十一



よくのまをそりくが評判とりの雀ともが鳳凰乃志るつとつふが  
 ぶくくんの口にはたがまれどよなればよのに付ぬきまごいふ  
 付て小糠もくはつろく七すみ目でいんやむおまがうる言ぬの作  
 にをぬやうにちりぬるもりたにぬぼとろり





燈火の光

吉田中十二



